

うちの近所 コレイチ

わが町 自慢紹介 28



貝塚に生まれた天文学者 岩橋善兵衛の業績を展示

「善兵衛ランド」は、貝塚市の生涯学習のシンボル施設として1992（平成4）年に建てられたものですが、昼夜共に活用できる天文台として一般に公開されています。星はもちろんのこと、太陽のコロナや黒点も観察ができます。

江戸時代の 天文学の発展に貢献

「善兵衛ランド」の名前は、1756（宝暦6）年に貝塚脇浜新町の魚屋に生まれ、後に独自の工夫で望遠鏡を作成した「岩橋善兵衛」にちなみのもので。善兵衛の望遠鏡は



善兵衛の望遠鏡。太陽の黒点や月面の様子も観察できた



岩橋善兵衛の像

寛政の改暦で幕府の天文方に、そして日本地図作成時には伊能忠敬にも用いられました。また星の位置や月の満ち欠け、潮の干満を読みとる善兵衛独自の星座早見盤「平天儀」を作成し、その解説書「平天儀図解」で彼の宇宙感を述べ、江戸時代の天文学の発展に貢献しました。それが認められ、名字帯刀が許されました。屋号が「鯛屋」だったことから「岩橋」になったという説があります。施設には善兵衛の作った「遠眼鏡」や「日時計」等も展示されており、その美しさは美術品を見るようです。

■南海本線貝塚駅から水間鉄道で三ヶ山口下車。山手へ徒歩500メートル
■開館時間…日・月・火…9時～17時、木・金…9時～21時45分 休館日…水曜日、毎月月末、年末年始 ■入館料…個人は無料 ■TEL…072-447-2020

1616ミニシアターが えいがか



(映画の画面の一部分)

「ホビット 竜に奪われた王国」

冒険ファンタジー映画の王道 見せ場いっぱい の2時間40分

トールキン原作の「指輪物語」が壮大な冒険ファンタジー映画となつて世に出たのが2001年の「ロード・オブ・ザ・リング」でした。3部作が3年間にわたって公開されて話題になりました。しかし、「ロード・オブ・ザ・リング」だけでは膨大な「指輪物語」を描きつくすことはできなかつたことから、その前章ともいべき部分を映画化したのが2012年に公開された「ホビット 思いがけない冒険」でした。これも3部作で、現在公開中なのが第2部の「ホビット 竜に奪われた王国」です。

背が低くて臆病なホビット族のビルボ・バギンスが、ある日、勇敢なドワーフ族の仲間とともに、彼らの王国を取り戻すために危険な旅にでることになりました。王国を奪ったのは巨大な竜のスマウグ。大蜘蛛、野蛮なオーク族などが行く手を阻みます。「ロード・オブ・ザ・リング」や前作を見ていなくても十分楽しめるのですが、架空の王国や部族、登場人物がたくさん入り混じるので、馴れるためには事前、事後に関連作品をみることをお勧めします。上映時間は2時間40分。監督はもちろん「ロード・オブ・ザ・リング」のピーター・ジャクソン。ちなみに第3部は「ホビット ゆきて帰る物語」で、2015年に公開の予定です。

Culture Navi かるちがーなび

これを許したらこれから何も言えなくなる

怒りと不安の板ばさみで

「このアンケートは市長の業務命令で、正確な回答がない時には処分の対象に…」という文字を見た時、不安と怒りを感じました。職場では、「業務命令のアンケートってどういうこと」「こんなアンケートおかしい」という怒りもありながら「処分の対象」が不安で、書ける所だけ書いて提出した人がほとんどでした。私自身も処分を考えると結論はなかなか出せませんでした。組合の集会に参加し仲間を励まされ、提出しないと決めました。



No.17 梶原 まゆみさん

「ひとりじゃない」と勇気がわいて

裁判で闘うとなった時、「こんなことはおかしい」「これを許したらこれから何も言えなくなる」という思いで、原告になることを決意しました。裁判には毎回多くの方が傍聴にかけつけ、励ましの言葉をかけていただいています。そのたびに「ひとりじゃない、仲間と一緒にがんばろう」と勇気がわきます。長い闘いですが、これからも一層のご支援をよろしくお願いいたします。

「スタンダップ」はシンガーソングライターのかわさきゆたかさんが作曲した「思想調査アンケート裁判」の応援歌です。

心に響くひとこと

皮を斬らせて肉を斬る
肉を斬らせて骨を斬る
柳生 十兵衛

危険を冒さずに目標は達成できない、という意味です。皮を斬らせておいて、肉を斬る。肉を斬らせておいて相手の骨を斬る。これが柳生新陰流の極意です。これはどんなことにでも共通のことかもしれません。自らを安全な場所に置いて、目的を完全に達することは難しいものです。何かを成し遂げようとするならば、自分も捨て身の覚悟で臨むことが必要でしょう。それでいて、自分が倒れてしまわない冷静さと緻密さも持たなくてはならないのです。

● 芸能史を学んだら
● そうする(大阪に行き
● 上方芸能を学ぶ)けどね
永 六輔(放送作家)

永六輔が若手の頃に1年間大阪で仕事をしたことについて、インタビュアーに「当時同じ考えの人はそうはいなかっただろう」と言われ、こう発言しました。彼は良い放送作家になるには東京のことだけではなく、あらゆる芸能の発祥地である上方の文化を知らなければならないと考え、大阪で渋谷天外や秋田實といった錚々たる面々の下で仕事をしたそうです。その姿勢に感心させられると同時に、彼にそう言わしめる関西の奥深さを再認識させられる言葉です。